

2010 年度未踏 IT 人材発掘・育成事業 成果評価報告書(プロジェクト全体について)

プロジェクトマネージャー：平本 健二 PM（経済産業省 CIO 補佐官）

1. プロジェクト全体の概要

未踏プロジェクトは、企業に対する支援ではなく優秀な個人をピンポイントで育成しようという思いや、アーリーステージでのベンチャー・キャピタルが国内で機能していない中で政府によるベンチャー・キャピタル的な技術育成ができないかという思いから開始された。また、未踏が始まった当時から、電子政府によるベンチャー育成、技術育成というものができないか検討されていた。これは、先進的な技術を政府でいち早く導入し、試行とブラッシュアップを行い、政府調達で利用されたという実績、ブランド力を元に優秀な技術を市場に展開していくという取組である。今回の未踏プロジェクトでは、この両方を併せ持つ形で、電子行政をテーマにプロジェクトを募集し採択した。そのため、当初の計画は、プロジェクト途中の段階でプロトタイプを電子政府サイトで公開し、プロジェクトマネージャーだけでなく、一般利用者からの評価も活かしていこうと考えていた。しかし、進捗の遅れや、プロジェクト検証に適切な政府内のデータがなかったことからプロトタイプの実証までには至らなかった。

プロジェクトの進め方は、ほぼ月 1 回の進捗会議を実施し、中間報告会を 1 回行ったが、プロジェクトが本格的に動き始めた 3 月に東日本大震災が起こり、その対応等で PM としての時間が十分に確保できず打ち合わせやその間の進捗管理が十分にできなかったのが計画外であった。一方で、今回の震災対応では、多くの未踏 OB が意見収集プラットフォームや電力メーターアプリの開発等で各自のスペシャリティを活かして活躍してくれたのは非常に心強く、単なるプログラマではない志のある優秀な人材が育成されているなとうれしく感じた。

2. プロジェクト採択時の評価(全体)

プロジェクトの採択では、全ての提案を読んでいる中で、「これは面白いな」と思うプロジェクトがある一方で、電子政府というテーマでは採択しにくいものもあり、その結果、検索系のプロジェクトを 2 件採択した。また、評価の視点としては、技術としての先進性よりもアイデアを重視した。世の中には、技術的にすぐくても、古い技術の組み合わせのアイデアに勝てないことも多く、未踏は学会ではないことから、そのような組み合わせアイデアと実装とい

うものを重視して選んでいる。

全体的な評価としては、前年度に比べて支援金額が小さくなったこともあり、提案全体が小粒であったと感じた。やはり、未踏プロジェクトの委託金で 1 年は開発に専念して生活ができる規模の支援が必要だと思う。

(1)「言語横断型の潜在関係検索エンジンの開発」

提案者が指摘するように多言語であっても文書解析せず関係性に着目するという点は、従来の検索サービスとも正面からぶつかるものではなく、面白いアプローチである。実際に、「〇〇における××」というのは日常的にも良く遭遇する疑問であることから、実用性もあると考え採択した。行政機関においても、「建築業界における業者登録制度は、情報処理業界における〇〇制度」や「日本の雇用統計は、フランスの * *」であるなどの展開が考えられる。行政機関は定型化された多くの情報が蓄積されていることもあり有効な利用が期待される。

また今後の、ソフトウェアの技術開発においてグローバル展開は重要であり、最初からグローバルに対応できる場所も評価ができた。

プレゼンでは、クリエイター、コクリエイターのまじめさが伝わってきており、その点も評価できた。

(2)「検索結果を精度よく絞り込むための類似検索システムの開発」

検索の精度を上げるために、類似検索から絞り込みを行うのではなく、正解文書と非正解文書をキーにして文書検索精度を上げていくアプローチは、実際の検索者の意識に近く、従来の検索のように絞り込み過程で正解文書まで検索対象外にしてしまう恐れも少ない。政府内のホームページの検索は、不要な文書が表示されると評判がわるく、そこを改善する手段として有効と考えられる。

また、選択により検索対象を絞っていく方法であり、将来はグローバルに対応できる場所も評価ができた。

3. プロジェクト終了時の評価

両プロジェクト共に進捗が遅れ実証まで至らなかったのは非常に残念であった。政府のホームページなどでの実証は宣伝的な価値も大きく、単に技術開発するだけではなく、このようなチャンスを活かす努力も重要である。

(1)「言語横断型の潜在関係検索エンジンの開発」

プロジェクト期間内に完成した関係検索エンジンは荒削りであるが、目的とした機能はほぼ実装している。まだ精度は荒いものの面白い結果を出している。当初目的とした「A に対する B は、C に対する D」という検索を行う時に、D が出てくると共に、D の候補に出てくるものなどが面白い。そこに新たな潜在関係などが出てくるし、その根拠文書が出てくるので、なるほどと思うこともある。例えば、「日本の東京に相当するものは、

フランスにおける何」と訪ねると Paris に続いて Lyon とでてくるところなど興味深い。また、翻訳ではなく、類似の英語表現を探す手法も提案されているが、精度が上がれば面白いツールになると考えられる。

潜在関係検索と多言語対応とを並行で行ったために遅れた面もある。多言語対応で時間をかけたので、潜在関係検索の精度向上に重点を置いた方が良かったかもしれない。

(2) 「検索結果を精度よく絞り込むための類似検索システムの開発」

精度は出ていなかったものの、単に正解と不正解を選択するだけでは無く、キーワードを選択し、その選択結果の検証ができるようにユーザインタフェースを工夫した点は評価できる。しかし、全体としての精度が上がっていないのは検索エンジンとしては致命傷であるので、そこは、今後改善してもらいたい。従来の検索エンジンにアドオンして使える簡易さは魅力であり、今後のブラッシュアップを期待する。